

自殺が起こった中学校での生徒の反応

～急性ストレス反応に対応すること、自殺の連鎖を起こさないことへの取り組み～

福岡県スクールカウンセラー・日本臨床心理士会理事
向笠 章子

はじめに

突然に起こった生徒の自殺に対して当該校の生徒は様々な反応を起こしていく、その状況で学校への後方支援を行った際に経験した「異常事態に遭遇した際の正常な反応」の実際を述べ、学校できる限りの対処で対応できる可能性を探る。

事例の概要

早朝に出勤した教職員が構内巡回したときに校庭の中庭にうつ伏せに倒れている生徒を発見した。発見時には息があったので救急車で病院搬送になった。始業時間近い時間であったために登校途中の生徒の大多数が運ばれていく生徒と救急車を目撃している。第1発見者の先生と早朝に登校していた生徒の話から校舎の4階から飛び降りたと考えられた。

当日 1日目

<生徒の反応>

- ・ 「生徒が飛び降りた」という情報だけが学校内を回り始める。
- ・ 当該学級で千羽鶴折が始まる。

<マスコミ対応>

- ・ 教育事務所で記者会見

2日目

<生徒の反応>

- ・ 飛び降りた生徒が死亡後も千羽鶴折は続き、学年全体に広がる。
- ・ 頭痛・体調不良の訴えで保健室に生徒がくる。
- ・ どうして、なぜという質問が出てくる。うわさが広がる。

<学校の対応>

- ・ 教職員に異常事態に遭遇した際の正常な反応を説明する。異常事態に直面した際の子どもが様々な反応を起こすこととその対処方法を検討する。
- ・ 臨床心理士は、教職員の研修でストレス反応が強く出ている教師を見つけて対応する。
- ・ 担任の「こころの健康調査票」を元にした個別面談後に反応の強い生徒や死のうと考えた生徒の面接を再度臨床心理士が行う。

3日目

<生徒の反応>

- ・ 全校集会の中で当該学級の生徒が泣き出す。その後に他の学年に広がる。
- ・ 集会後に女生徒がトイレで泣き出す。

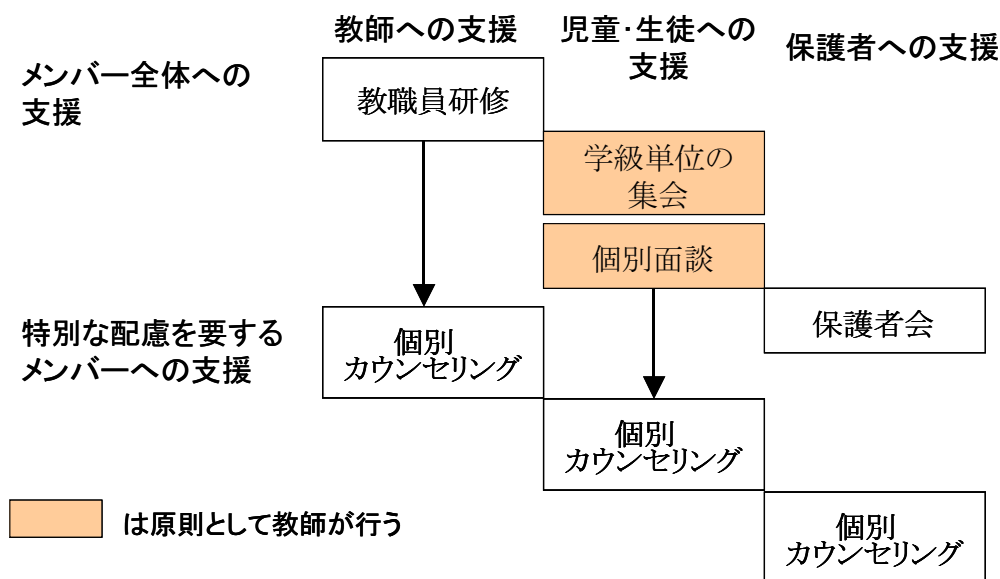
- ・ 当該学級の生徒が過呼吸を起こす。
- ・ 風邪で体調が悪い生徒、前日に自殺した生徒のことを思って泣き出した生徒を慰めていた生徒、前夜にほとんど寝ていない生徒などを含めて 15 人くらいが小部屋で休む。中に終日眠る生徒がいた。
- ・ 葬儀に出席し気分が悪くなった生徒を、担任が保健室に運ぶ。
- ・ 日ごろ問題行動がある生徒が、興奮して窓を割る。

<学校の対応>

- ・ 反応を起こした生徒の対応を状態に応じて対処し、必要に応じて臨床心理士とスクールカウンセラーの個別面接を行う。担任らと今後の対応について協議する。
- ・ 保護者集会でうわさの確認が行われる。ほとんどが少しの事実に尾ひれがついた内容であったが、全てに説明が入る。
- ・ 長期的なフォローの可能性がある生徒の確認を臨床心理士とスクールカウンセラー、担任らで行い、その後の生徒を教育相談の中でフォローしていく準備をする。

終わりに

生徒の自殺という危機的状況に陥った学校に対して、その対応を学校が主体的に行う。そのために緊急支援プログラムを活用している。初期に起こる生徒の反応に対して適切な対応を行うことで生徒への影響をできるだけ少なくし教育相談に繋げてフォローするものである。



緊急支援プログラムの流れ

緊急支援プログラムのタイムテーブル

日時	学校内緊急支援チーム	教職員	生徒	保護者
事件当日 1日目	担任への個人面接の依頼	個人面接	千羽鶴を折る	
2日目	学校内緊急支援チーム結成 緊急支援プログラム打ち合わせ	教職員研修学年会		
午前		当該学年担任らへの研修・確認	こころの健康調査票 千羽鶴を折る	
午後			担任等による個別面接	
夕方		1年担任らへの研修・確認	通夜	緊急PTA役員会
3日目 午前	全校集会への助言		全校集会	
午後	緊急保護者会打ち合わせ	3年担任らへの研修・確認	葬儀	
夜間				緊急保護者会
4日目	待機			